

土方 巽

舞踊は男色である

—しみこんでゆくものへの

実存が愛電なのだ (抄)

ARCHIVE

アーカイヴ

HIJIKATA Tatsumi

土方巽

公開討議

これはすべてのものに手置れを
与えて参加する踊手の担いが社会
少年が、戦いは己へ身とゆだねる
舞踊はそのさげすまれた演技の
である。舞踊は男に或る刺さる
更衣室の扉をさげすんで、私の踊
ることになるだろう。

この「舞踊は男色である。しみこ
んでゆくものへの実存が愛電のだ
」は、20世紀舞踊の会の空に当時、板
垣の公明、鶴屋、舞踊と地蔵の土

2019年1月21日(月) 18:30-21:00
慶應義塾大学三田キャンパス 東館5階会議室

Monday 21 January 2019 6:30 pm – 9:00 pm
Keio University (Mita), East Research Building 5F Conference Room

参加無料・入退場自由

Admission free, come and go anytime

土方巽アーカイヴをサーキュレートする資料体が次々と現れています。

- ・高井富子コレクション
- ・池宮信夫コレクション
- ・石井満隆コレクション
- ・辻村和子コレクション
- ・副島輝人コレクション
- ・吉本隆明コレクション (音声・映像記録)

それぞれのコレクションの資料がアート・センターの収蔵庫に格納されています。まだ全貌が見えない長尾一雄コレクションも想定して、本討議では、それぞれのコレクションの特徴や意義から、さらには今後コレクションをどう扱い、どう装置化すべきか、具体的な展望と処理についてまで考えることとなります。

問い合わせ：慶應義塾大学アート・センター [担当：森下]

TEL:03-5427-1621 moris@art-c.keio.ac.jp

Information: Hijikata Tatsumi Archive

主催：慶應義塾大学アート・センター、ポートフォリオ BUTOH

企画：慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ

協力：土方巽アスベスト館、20世紀舞踊研究会

これまで8年にわたって、土方巽の命日1月21日には、「土方巽を語ること」を実施し恒例としてきました。2019年はこの恒例のイベントではなく、新たに公開討議として「土方巽/アーカイヴ」を開催します。

2018年は慶應義塾大学アート・センターのアーカイヴ設置20周年でした。記念事業として、アーカイヴをめぐるシンポジウムを開催しました。もとより、シンポジウム開催でアーカイヴをめぐる問題が軽減したわけではありません。アーカイヴのためのアーカイヴ論は用意できませんが、アーカイヴの現実には適わないからです。

近年、土方巽への問いかけが、新たな関連資料の発見や提供とともに続いています。土方巽アーカイヴが、アーカイヴという装置にfixed starの

ように位置しつつ、周辺にさまざまなplanetが現れ、時に接着してfixed starを膨張させるかのような状況です。

舞踏研究をより深化させるために、未知、未収集の資料への接近は不可避であり、アーカイヴの使命は、何と云っても資料の収集と公開の連続にあります。とはいえ、その使命を語ることで止まらず、そのプロセスにはさまざまな事象が生起し、関係が発生し、対応する活動が求められることも確かです。

今回の公開討議では、そのconstellation(見取り図)を紹介し、資料群を検証し、歴史の探索を試みるとともに、土方巽への問いかけに答える位置に立つことをめざし、あるべきアーカイヴの方向を再考します。

発言者：池宮中夫 木部与巴仁 吉増剛造ほか

Guest Speaker: Nakao IKEMIYA, Y. KIBE, Gozo YOSHIMASU

「土方巽アーカイブ」も、土方巽記念資料館の活動を踏まえつつ、時代の新たな要請に応える機関として位置づけられよう。アーカイブとしては、土方巽その人とその創造、そのアルファからオメガまでの情報化に挑んでいる。その最大の特長はデジタル・アーカイブということにある。土方巽の舞踏のデータがジュークボックス(=「デジタルの箱」)に収められ、網の目状にリンクされた情報がオンラインでの検索、調査に供されることになる。現在、文献資料、公演資料、舞踏譜、関係者の証言、写真、映像などから成るデータベースの制作を急いでいる。デジタル情報として新たな生成を経て発信される情報は、土方巽研究や同時代の芸術研究に寄与することは確かである。

土方巽の舞踏創造の方法は秘儀的でありながら、その実、解析的でメカニカルであった。しかし、土方巽は舞踏を体系化も理論化もしなかった。ただ「舞踏」という不分明な概念を残した。舞踏家にとっても研究者にとっても、それは「不自由な自由」にほかならないが、アーカイブの可能性はそこにある。舞踏はいまだ定義されない芸術である。デジタルの箱にすべてが整序化されて収まるものではない。収めようとしてはみ出すもの、それが何であるのか、アーカイブはまたそれを知る実験でもある。

ARCHIVES

目下アート・センターは研究アーカイブとして、「土方巽アーカイブ」、「ノグチ・ルーム・アーカイブ」を構築中である。しかし、研究アーカイブが備えるべきシステムはかなり複雑になる。本質的な課題として、少なくとも三つの点をあげよう。研究アーカイブでは、まず第一に、諸資料との「感性的」な触れあいが必要でなくてはならない。「知」を発動させるためには、情報やキーボードを一度離れてみる必要があるからだ。アーカイブは、資料との触れあいの空間でなくてはならない。第二に、人間の創作活動を把握するためには、活動の生成的(ジェネティック)過程を追体験できなくてはならない。したがって、資料の分類システムにしても、図書館の採用する、いわゆる普遍分類システムは有効ではない。独自のシステムが不可欠である。第三に、人間の想像力を特徴づける根本は、イメージの飛躍にある。言い換えれば、メタファー的で連合的な特異な不連続性にほかならない。諸資料のなかに、資料としては不連続性でありながら、イメージとしては連続するモチーフをあとづけたい。

こうした課題に応じてくれる研究アーカイブ・システムの開発は、ハード、ソフト両面でなかなか実現がむずかしい。適切なシステムを構築するために、図書館情報学や理工学部の専門家の支援を受けなければならないし、なによりも一次資料の内容を把握するための気の遠くなるような地道な資料整理作業を実施しなければならないからである。アート・センターは学内外の多くの方々や機関のご援助をえて、蝸牛の歩みではあるけれども、大学という場に新しい知的空間を創出したいと努力をつけている。今後とも、ご支援を賜りたくお願いする次第である。

舞踏と呼ばない舞踏?

『新生活』第14巻・第2号 1964年



た男たちが、全く脱皮を願った働き方でも、ゆとりと行進したり、小児病的な動きをしたりする、舞踏的な進行の舞踏的動きは一切ない。ただ、動くことは空

ある 出合い
吉田舞子 舞踏家
ある 出合い
吉田舞子 舞踏家
ある 出合い
吉田舞子 舞踏家

白石かずこ 三好夏村 村岡空 村岡正夫 入木忠崇
劇団 白石かずこ 三好夏村 村岡空 村岡正夫 入木忠崇
佐藤文夫 中上哲夫 諏訪俊

舞踏は男色である
——しお二人とゆくしおの人の
実存の愛の告白(1964)

20世紀舞踏、発見せり!
『20世紀舞踏』第2号 1959年

肉声だけが生きていた!
『ポエトリー at ニュージャズ』13回 1971年

ポエトリー at ニュージャズ

13回 6月30日(水) PM.7-9
渋谷・緊急前 平井ビル3F
ブルチネラ 400円(飲みもつき)

演奏 ナウム・ジップ・アンサンブル
藤川義明 菊川敬忠 吉田正 角儀和敏 有田敏明 田中根樹

助演 白石かずこ 三好夏村 村岡空 村岡正夫 入木忠崇
佐藤文夫 中上哲夫 諏訪俊

去、われわれの舞踏するとは、
その舞踏は、舞踏の音楽の、
その舞踏は、舞踏の音楽の、
その舞踏は、舞踏の音楽の、

舞踏方法において強制されるもの
と何か共通点があるように僕は思
うね。その意味でも石音舞踏
の行進は非常にラジカルな感じ
がした。

堂本 それにあればたまたまその場
の緊張がない、あれが出現した
なつて人間の根本に對する疑問の
イメージが表現されているわけ
だ。

堂本 これにはそのシリウス
な緊張をサツ、解くような、日常
的なナンセンスなものを。日常
れがまっ構成されない、隕石され

堂本 これは日本の現在が表現
されている、過去の日本でも
米来の日でもない、つまり、ま
だ取りのある現在の日本なん
だね。舞踏化する以前の形勢がそ
のまま置かれているわけだ。また
あの次義の語だけども、あれを
最初の果てにバケツのところがへ
つて、妙立願行をしながら舞で
強い思い、あたり一面に電氣液
をぶるまける。あれはセックスの
イメージだけれども、ここには何
も言えない解放感あつて、セ
ックスの象徴の非常に健康なイメ
ジで、それをこんな不自然な形
で封じこめて、その現実の個の不
健康さというものが同時にグロー
ブアップされたわけだ。

堂本 不健康な場面を並べて行
く背後に、そうした原始的あるいは
古典的な健康さがいつと石音の
刺戟にもさういうイメージがあ
る。

デジタルジュークボックスは有効か?
ARTICLE No.1989 年